







假名垣魯文關  
久保田彦作著  
陽洲齋周延画

錦蔭堂



新福  
招迎





A 449



外題園延茶

前編上

彼高垣魚子文閣  
 久保田彦作從  
 錦葉堂書梓

新説  
 向  
 株屋

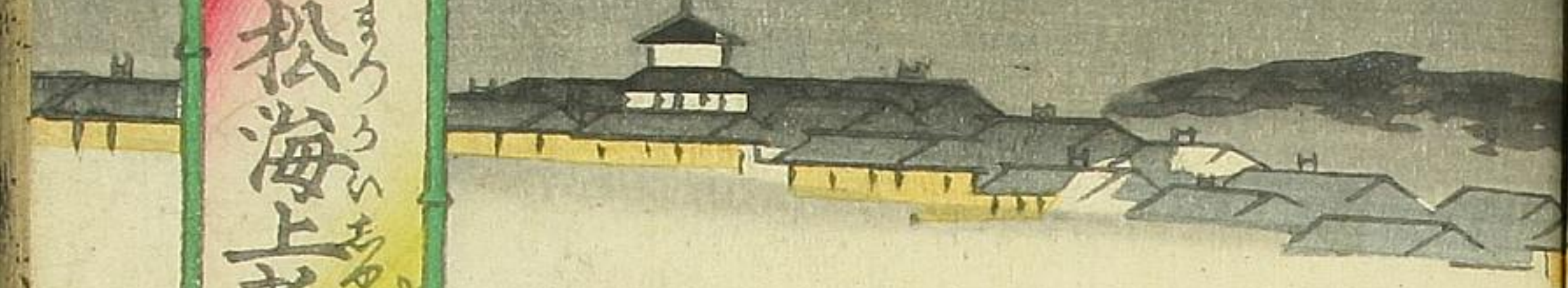
海上新話  
 上  
 可  
 可



48-8120



鳥追阿松海上新話



前中



我假名讀新聞第五百四十號客歲十二月十日を以て始め  
 て雑報欄内に記載せし鳥追阿松の傳を間々本年一月十  
 一日第五百六十二號ふ到り嗣出たる事十四回未だ結局  
 及びいざるも僥倖にして千町万町の衆目も觸れ喝采の  
 声價を得たる操觚者の歡喜の餘りも思ふ筆を走る  
 あり然りと雖も春霞三筋を撃ぐ長物語ハ頗る新紙の本  
 意に違へを其概略を次號ふ掲げ大團圓とおさんと欲  
 と錦榮堂の主入遺憾として乞ふて其首尾を全くせんと  
 す原由ハ遙うに過去一明治元年の春よりして同十年の  
 冬ふ止る温故知新の大実録題して海上新話と號け茲  
 三絃の緒と解くと云ふ

明治十一年第一月

假名垣魯文記



鳥追  
 阿松  
 海上  
 新話

錦榮堂揮





濱田正司

いと長き  
白ゆ  
異相  
追

雪駄  
直  
大坂  
土



秋葉山  
常燈

風の名ふひまろ  
尻  
流しつ  
柳の

非人  
定五郎  
娘  
阿松

阿松





鳥追阿松海上新話初編上之巻

第一回

假名垣魯文閱  
久保田彦作著

梅が香や乞食の家も覗くと晋子の吟の古き林えも新まる代の春立頃  
 東京の未と江戸とよび木挽町の乗女かゝる小羽生の孤屋の板庇一月波軒の破  
 損家小親子の非人あり其本夫定五郎八日毎小辺りをき尾張町ある布袋  
 屋とのへる呉服店の曲り門小履物直一の露店と張り妻のか士代(四十二  
 と一女阿松の春の香返平常の女太夫の笠深く包めど白ふ島田留廿の上と  
 ニツニツ超と花香の市中高小高く大店向や絶着る窓下の雀賀の茂も  
 仇りまて玉と欺むく母娘其以世上小小屋久米三と人も門より字子あるは  
 もまゝ夜末のうりあて維新の際も諸藩の兵隊大名小路小屯管しを  
 血腥さの時あまは女太夫と窓下小を月て種々の唄を謡いせ守と細か  
 阿松母子の日小二四の稼ぎのめまきと又あまきるとかひひ小果報も

阿松

三





中とのみれど阿松の顔は似たりは然深き生れとらひ母の衣の  
 娘の色香も迷ひ濱田の意も入替りの子折て金三百圓余を痛  
 とりて正司の多くおめ身なれは阿松のたに  
 家親調度と老ひ捨此より早くも  
 隊長も使えし其に  
 禁足を申し付られり  
 阿松の心は深ね  
 濱田の通ふべき緒絶の  
 橋の名も因る橋場の里の沙  
 入堀向ト非人を大坂吉との  
 者りり阿松の兼て同気目  
 たる破落声のあらしう人目の  
 越て互ひ父母の目と目ひ



度々密會せりとと母の  
 代り悟りて素より  
 色も俗業の物けと我  
 子お若  
 兼知で  
 あらざらし口に出さ  
 見えぬ涙

正司

阿松

兵隊の濱田

郭の内  
或郎

正司の者ありが  
 深く此阿松を  
 懇慕ひ侍を  
 と求めて米女  
 が家の定五郎が小家へ尋ね  
 りき金ありては

十

十



忠孝の目々  
阿茶の門へ来て調子  
策三筋の糸小笠の内へ  
覗く仇の姿おぼえ惚けん  
床でも覚ても忘れ兼  
思ひの丈と文おぼえ  
或日阿茶が袂へ入  
とが何するらん

毎さつ一夜の情といほえお  
美実をそり文休お阿茶の例の  
金もある壁醜き男でも  
否とい言ぬ渡りお船子速  
返ると見世先より投の心  
知をそりお茶の悦とび  
言ん方き今宵密お橋場  
の小屋へ忍び来れよと女まご  
急ぐおれおあれ主個の忠孝と  
居間お呼よ金三百圓  
渡り七枚の金此金の橋所の何某へ仕切お渡を令さお  
五音芳るおおおと意をぬ主個の教おおお  
おひて三百圓と紋布お入れ我家の門を立出一か心お

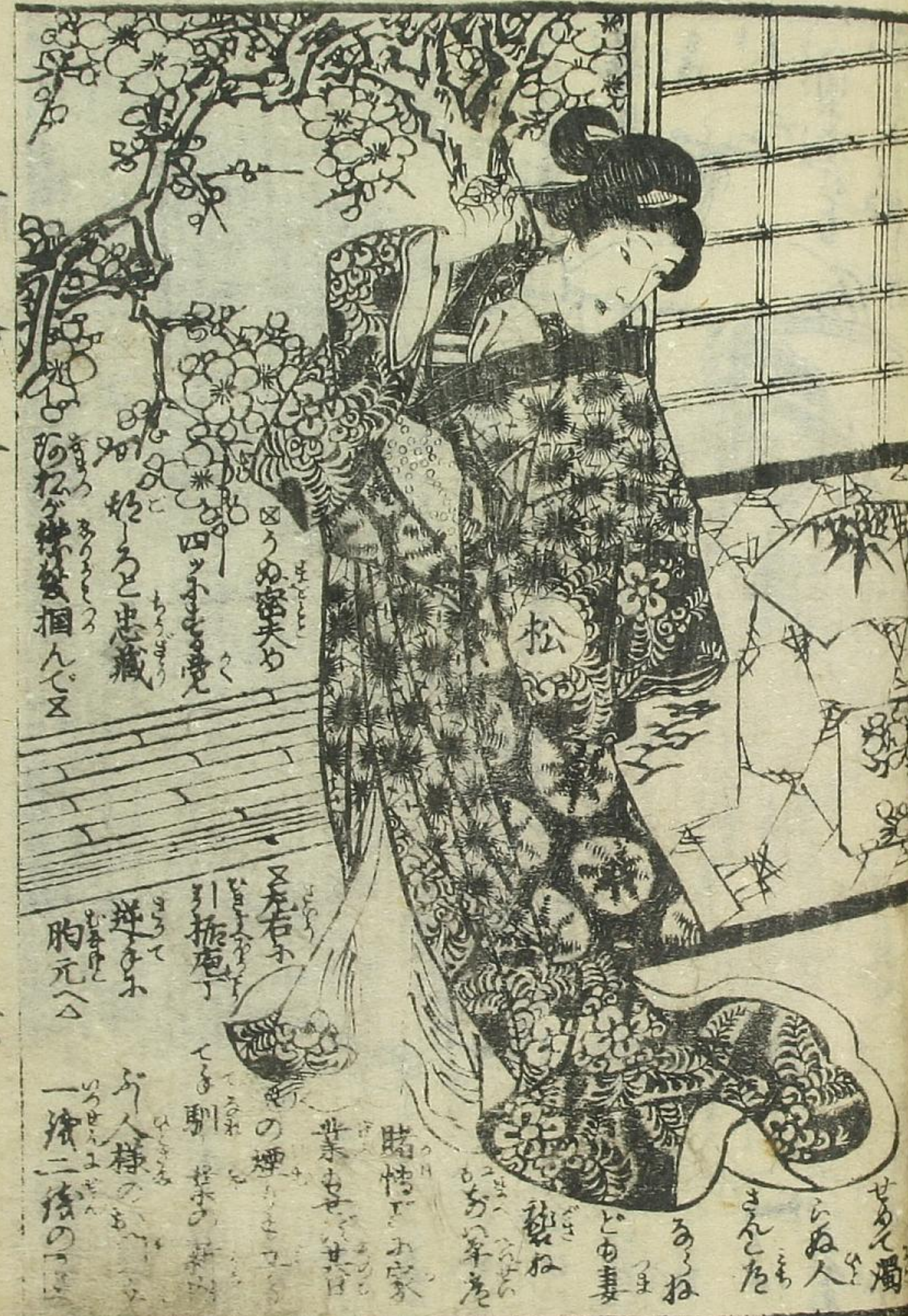


お様お  
其日の名  
間をさ  
或家お  
びの首  
尾へ何  
と内入れ  
阿松か  
姿と柱  
酒有き  
仕度し  
いと

有項  
天将  
煙  
小酔  
の



床よとの鐘の延屏風破れ栞園お  
 枕の憂とぞかられ多るを後ハ  
 後の憂とぞかられ多るを後ハ  
 非人小屋初めて泊りしこと  
 りひ若や人ふ悟らまこと我  
 身の恥と故少の眠はば防松ハ  
 宵ふまてせし酒ふすやく床  
 入る真夜中さら表の焼りゆ  
 勝ち知りたる我家の雨扉  
 足で遊久縁先小定まを機  
 大坂吉の出又庵丁と口小齋  
 突然屏風と取退けけ



松  
 四ッ小定を  
 松と忠藏

松  
 松と忠藏  
 松と忠藏



吉  
 既不利し  
 手不廻り涙  
 共小声を  
 今更も前の目  
 掠め忠  
 不美と  
 のの壁を  
 後殺され  
 由言解  
 舟の産れよ一度  
 素人元と枕とる



# 呉服反物

浅草並木町

金松直物



口いろく小珠  
虚々実情へ  
の山吹色手拵  
と精ひお

浮き舟  
百田の金と  
安いのと  
と胸

板屋本店  
退りしを  
板屋月

女の内で  
漸々身を瘦  
世帯回し五終  
も酒  
人間不産れても  
織多よ七食と卑

一めらま珠小邪見のお  
前少のふく愛妻かごと  
も竟わりのあぐら  
さんと初の中も命のり  
罪い松と體と突付  
ままのわりと殺し

てと阿松が覚初小流石の  
吉の張切の腕ひるじり  
後ろの荒壁のあまきより  
まのて吉小向ひを理を迫て和り

菱小菱見一心地をて番の根もあまき  
お千代小此場の扱ひとと  
内證の親娘二人の水入らば



登る主個より預りし金  
命を松輪しと心二回のか  
みれを代が初めく金百田  
とを渡して虎の尾と流毒蛇  
の口と退れ一死と裏割南  
抜て花び空う秋雨小ひの  
まより濁し柳枝香  
時と放れて逆ゆき  
タリ○滋子三人傍と  
まの一上口さん

上出来と阿松のいへ大誓  
由座下を廻へ扱ひ  
一元ろ仕組と及物屋

可  
二



水揚帳  
金銀出入帳

三昧既での上  
血とどねいふ  
処後う留て  
まことのふを

●案ト云い猶記公保深  
るく浪流津ふとや  
今宵が別れぞとんこ  
小送る旅路の門出  
時は明治二年如月  
初旬あり軒端の梅



命替りの心  
判で耳と  
格へ此石  
回との小傍うらな代  
我笑一羽の小防と一廉の投木  
つて腕をささうとあつて目尻の目と  
思んで遠くの乳保合のうを見ぬやりの祝の意

其以東京と久し江戸を更ふらま  
百事維新の御新政小民の困苦と  
故のせられいと有難き代り

首尾よくつて百田久谷田南のニッモウ観音の  
明七ッ大層をさる次細を風と遠く茶碗の  
酒と三人廻る逆りくわの行ぬ身の果  
後ぞとひ白玉のちゆりておとりの  
夜明をくどるふたる○此後お松大  
坂吉の善らぬりのと色ふこととせ様  
悪計と廻らして先小波田西回との  
今又ね及のちおと密夫ありとのりて  
金白田と編うとじと子も其筋へ聴  
ふ日あるは彼等の身おとんと悪き及  
堅とる半代娘お松と大坂吉の二人に一度姿を  
隠させ二年の其内吉が古郷の大坂へ密お身とあせ人おまは  
世の口碑と遊るふ如くと親子と膝と突合島ふるりて身の上と



古巣と技師まの  
川と外れて身の上  
をの謝へやと古半  
小古布ふるたゆ



三助の命  
毛の長髪  
また三尺  
食色  
手拭ひ  
張せと身  
悪漢毒病  
首途と



備前徳利の樽酒小身のひ色  
竹の皮黄染めあるを買らぬの元  
安次郎の門口より細目小  
甘あそ  
葉越しの  
仲間同士の  
賭博小買債の  
傍りて見せし二入  
松小上りしふり  
おて珠らじや  
吉原どのに  
米女が原の娘は  
いと主人振え  
底氣味悪く声  
ふあつて扱のさ  
兼て活し  
おつてあつた  
おつてあつた



千里の  
蕪小  
猛虎と放を被諺の  
秘るらん其目の黄昏灯と由は小  
岳川秋の裏にある東海禅らの  
境内小兼て知己の非人仲間小安次郎と  
の者あり阿茶が父定五郎といけ馬の友  
とて義兄弟の因とて信が 秘るれい  
二人を養ふ今を養てあつて  
旅の用意も調へをやと  
いとね母と名ひや大坂  
吉の平常より安次郎が酒と好  
めは僅るらもちかたをい松の 匣

同ひ  
もけて内と  
母の言せの  
う故妓女賢し牛  
賣接したるの  
母の言せの



仇槍とあること共  
物語はと先吉が古々へ身と  
落つけんと  
逐一小安次郎

心折解て  
悪いことある  
陽合ふが日次の  
よみみと此とたそ  
人の心の奥の  
るへと主個八



先小案内  
七入るや月没  
夜死

如何ある  
とと仕出  
すのたの次の  
巻小解  
分登

古今名婦傳	一帖	東京新編
鹿兒島實記一夕話	三冊	鳥追技変海上新話
鳥追技変海上新話	三冊	後篇
東京関化卅六景	一帖	小學入門彩色八
小學入門彩色八	一帖	同寸珍本
同寸珍本	一帖	諸派繪巻古あらしの志あ
大日本物産圖會	五帖	千代紙歌謡口傳
俳優三十六花撰	一帖	羊子

# 分

和漢書籍  
東錦繪  
問屋

東京二大區三小區  
編者 文保田彦作  
大倉孫兵衛





再説東海寺の

暮六ッ袖

浦の波小窓

さ歩行

新宿

の

客の  
又妓橋小碎

虫三絃の音

防別の油をさるを指返と徳利小うのま

熱胸小色茶碗の

堀豆腐元より河

松小吉蔵の欣

小碎由まのりの罪

料由お忘れ

阿松

手馴三絃の

調子由落

下り吉の

手枕小





数る滝も七ッ五更ふをさ  
 朧ろ月流石お松も生れ古郷を  
 今宵旅路へをさ出まわりの帰  
 り来ん高砂の松小甲斐の池  
 日影の身せめて今夜はひまへ  
 とりの小主個の安は舟由傍  
 より泊れと進切らふ渡りお  
 船の友堀お継りておるま  
 錠縄酒も徳よく飲屋一破れ  
 て指まご隔の後夜のの相ま  
 為晴き二天の厨房お入りおける  
 跡とどろと見定めて安は舟と  
 門口の備りおとせしつておるま



忠  
 或ひ六尺指  
 或ひ六尺指  
 或ひ六尺指  
 或ひ六尺指

下下儀侍と半頼お茶表の方へお  
 けく後おわよき月影もさし海不  
 津まえて星もさし、漁舟火小修ら松中の  
 おまおれおれお家の安は舟か  
 取締おのち密へ密小注進おる  
 得るおれおれお表より外角おはる



松  
 英一松の二入の機織  
 引きお小吉の南無三捕方  
 布巻と手子く加退を雨  
 姑の度の方へお小の



松  
 日本同の





折とあり  
忍ち繩とを  
方おのち  
追も松か  
行燈の灯  
家内へまの男  
武合辨小女のう  
まれば由断とのみ  
あゝ非ざれど△

身仕度へて壁おちり流ひ  
退れを  
脊戸  
口より入知れん



月夜に  
小楮の籠下忽  
まあ吉の利腕と  
志さうふ打振  
られあふ  
以て堪えま  
その保其火不  
ひれ伏す

△皆戻  
先の音が  
方お同向  
△皆戻  
吉  
△皆戻  
吉  
△皆戻  
吉







死情ありし兵隊元い詰りてお松が裳裾小なりつくと  
りんと拵ひて枝より枝自由自在小ち登り

さあぐ真珠の袖えと渡す小

さも似たりお松又り

雲のぞく照る月

と隠しけり

松の裏を隔

この怪の奴

その月と小

情とて

身も解くと東家の

及運よく由去年え八れ折流の石を



△龍の其名の七重八重

そのま柱らふ舞のれ

兵隊

の

面々

たえ

お松ら

取次

吉

ふせ町へ引りんと舞ひまをりまらま  
屠所の早の歩りまをりまらま

折流の石を

あて懐我のゆく身体お少の木のなほと此処の

兵隊も夜なれば毒瘴の必らひ延ん夫れ

必とあひひくと表の方より畔道ふと際

さへ東京と隔りて後ろの天家の社つづく

山たお勢一の時を移せぬお松の唄

お松が卒して入るき森の樹のる

お松が卒して入るき森の樹のる

お松が卒して入るき森の樹のる

お松が卒して入るき森の樹のる

お松が卒して入るき森の樹のる

お松が卒して入るき森の樹のる

お松が卒して入るき森の樹のる

お松が卒して入るき森の樹のる

お松が卒して入るき森の樹のる

お松が卒して入るき森の樹のる

いまこそあつる処のふへー  
○そまのぬを捕縛と  
るじ被吉あいらしめるの△  
大坂土下り



横目ふみ怒りの  
声ふたそそぎ

やわらふ安ん

と足て踏と

如何小金が

とつても仲間

の産産れ登へ

悪のてお繩ふかの連累

せつ々夫先を一旦結ん

成不ど已ふ縁の他人下あ

お松お父定五郎の好身あ

る金目とて人て呪り穴

おんろ巴ね地獄へ



目見もゆいせ  
有様お安次郎ハ  
身と着の「云

白おねたそたぶくと

吉い左右とえ返りて

知とのあお新相良れ

定あり未結る奴と

此上りのあひぬ

眼ととちておねぬ

沖と越へ「大膽不

兵隊の吉あを繩付

安次郎あ返りて五

あふ勢を集め意気



河濱の責の其に

此笠の臺か

野暮をよ

半らり死ん

てゆらと此

恨

恨

恨

恨

恨

恨

恨

恨

○此後大坂と

あり阪と五吟味

えより

不飲の

吉あゆ

度くの

持問

更小

あしも

白状

居ろと

眼

日

町

六



七八月の間と牢内ありて  
其の御新設の坊  
あてに刑罰の寛

大をせら  
民に仁政と

施す  
積年幕政

小苦めら  
民の疾苦と

救りせら  
刑法と

くはぬ  
あはれ

の罪悪の二の

編り  
あの人と殺せ

又盗賊と  
是と長の年月と獄屋小

送り  
至つて種きと

翌年の二月と

吉高い  
坊の罪科と

一年の徒罪と申

つけら  
七島のとの内ある三宅

△島  
△島に死せら

凡暴き  
凡暴き若根の松に犯せる罪の口

耳  
耳ふつき

命  
命の

粟  
粟

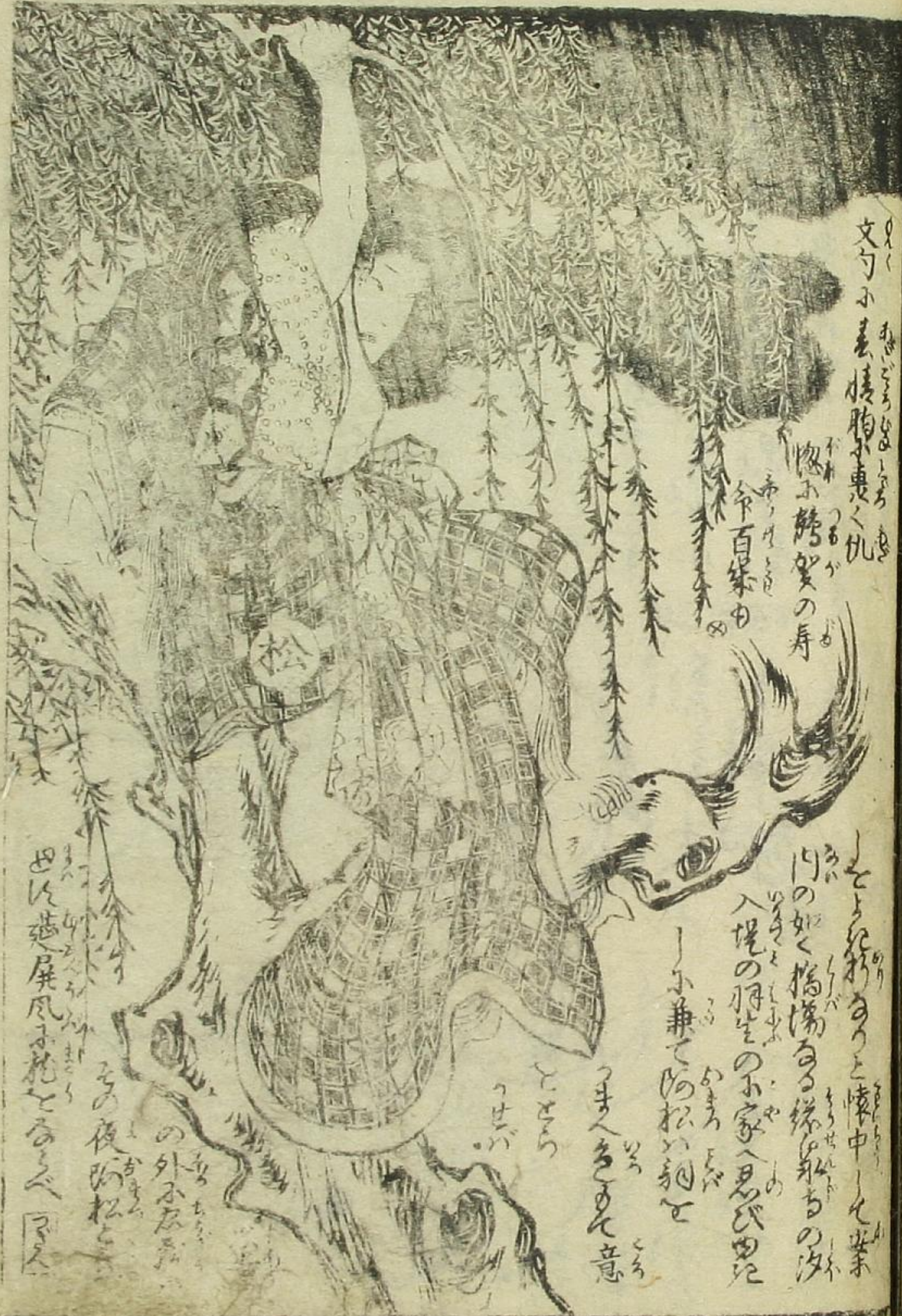
或  
或

夜  
夜

られぬ  
られぬ







文句小長情胸不夷之仇

惚小情女の寿

命百集也

とよねおのりうと懐中一七葉  
 内の如く揚揚する縁は私ちの汝  
 入埋の羽生のお家へ見ひ見  
 一兼て阿松の細て

つまも多て意

外不な  
 の夜阿松  
 世は越展風小花とる人同

阿松



阿松のとみどつひ  
 やそ千鳥啼く死の

月と詠在りうと

○却つて爰小説おの

松玄ひ(洩ぬ浅草の

観世音小娘とと彼並

木所の松玄の夜代白角のち移ハ

日毎小門へ阿松田原が新内布の此糸南味落る

短うた浮世と

悟りて由

阿松が終之  
 小結 絶句  
 と由厭はどそ  
 必ひ絶る  
 玉をた人

かきこに 運びお香とい  
 りらぬ阿松を返す不意の空と

ちち主個を渡せ二百田と橋所の

何某へ仕切不慮せと云ふら凡





あつ身と百部... 身のおま... 思つて... 百部... 中央不足... 主家... 打あけ... 如何のせんと



大坂吉... 密夫... 害の母... 百部... 夜... 甲... 人... 吉... 正... 吉... 春...

あつ身と百部... 身のおま... 思つて... 百部... 中央不足... 主家... 打あけ... 如何のせんと

河

下





田舎の... 五十四各... 二帖...

大日本物産圖會 五帖 大志... 志あり

俳優三十六花撰 一帖 千代... 口邊画思

東京開化卅六景 一帖 草... 新... あり

小学入門彩色入 一帖 諸... あり

鹿兒島實記一夕話 三冊 重... あり

鳥建於海上新話前 三冊 百... あり

古今名婦傳 三冊 新... あり

古今名婦傳 一帖 東京... あり

**分** 和漢書籍 問屋 編輯 文保田彦作 東京第天區六小區通丁日十九番地 大倉孫兵衛





金とその後小  
流くは鏡の後の世で  
草葉の

此書は不た  
が犯せし罪の  
次守と流る  
結り口

勤め上と由水の泡女迷つて  
暖簾を分て芳  
後でいさぞや父母の  
非業の死を遂に  
死支度ア  
結びさり帯解を  
榎の枝小引の輪小  
ますを以ての方  
とて拜と死後の  
証と彼財布書  
をといは侍への枝小  
結びさり帯解を  
榎の枝小引の輪小







女子の  
声の  
忠義の  
あはれ  
ひがみ

留め  
待て  
とらふ

知り  
おつ  
涙  
と迄  
さう  
とさ  
一  
な



斗り  
賣死  
由皆  
前世  
約束  
死後  
其内  
柵め  
閉帯  
既小

人目  
其内  
柵め  
閉帯  
既小

下  
殺  
留  
死  
折  
返

阿  
林  
下

阿  
林  
下



此の果報も忘れ  
 兼ても治と慕ひ  
 歩のあらぬ  
 乃の世の今も  
 十日爰彼処と時よ  
 まき旅鳥の今  
 迷ふ旅鳥の今  
 宵出逢し日念  
 ぶる浅草寺の観音  
 さあ五利益あらん



今此世小の死ぬ  
 逢の上で身の決白と詰  
 どの手とらせぬ未来  
 一蓮托生とりのて爰の木  
 退れの跡仕立  
 及公答むと由夜考  
 恥める



夜の業をなすり殺し  
 耳小堂への孝音  
 透して教を合せ  
 其方を  
 重なる罪も  
 堤で百山を流り  
 大坂堂と母さん  
 見られ死に  
 恥める

河

三







徳川 東海道浦原宿  
徳川 徳川之助頭



麻呂多屋  
長川屋  
尾川屋

頭は我のこころを  
元から身おりの果は其  
方色小迷ひも今及  
出逢ふは尺せぬ袖の  
合せぬ  
古の維波は密行の  
此も小一且  
死ぬるとおしり我の思の残りしを  
負債の金再び主個返済のよそおわん  
旅の貝酒も小手ととて初旅も主人因上の夫



入目と  
旅籠下  
夜の後のもの旅枕のなぬ  
左の心地して彼  
小田原の宿まきのいり  
白の末さびに翌日名小  
玉柳首巫根の山と越さるるの  
東海道に  
連れの枝は小  
解今後らうに枝もて  
夜の内矢日村ある中必  
り密子旅の羽を  
の日教を  
連れの枝は小  
解今後らうに枝もて  
夜の内矢日村ある中必  
り密子旅の羽を  
の日教を

可  
木  
下

五



其はまご旧幕の脱走隊を彼の山  
要所より陣と決り早も東京  
安んぶ諸藩の兵隊月夜  
條色と山名おぼて内戦争の  
有りぬ物強き事

みれば忠告の二人の者世と思ふ  
罪ある身も衣食何とぞ御氣も  
錦さきと肩附る髪梳きと寄る人  
ど小引さ遠ふ年より更み心自安堵されい  
若き女の眉毛ありて六階次の攸りの悪  
白んを松い髪小眉毛と刺落し髪も結を  
草米ね吟浴衣の上着より別ぬ  
田舎婦の物飾

形小くく至根の裏る矢倉沢  
の山竹と三島へんと案内者と雀ひつ

駕  
釣せし  
乃と山又山の嶺組  
あるは忠告  
困ト果  
僅二日路りて底豆  
踏出ー今一足由



大膽不  
忠告と  
三島の  
一七辛  
春の  
着の街  
駕籠  
駕籠で  
忠告と  
おねが  
おねが

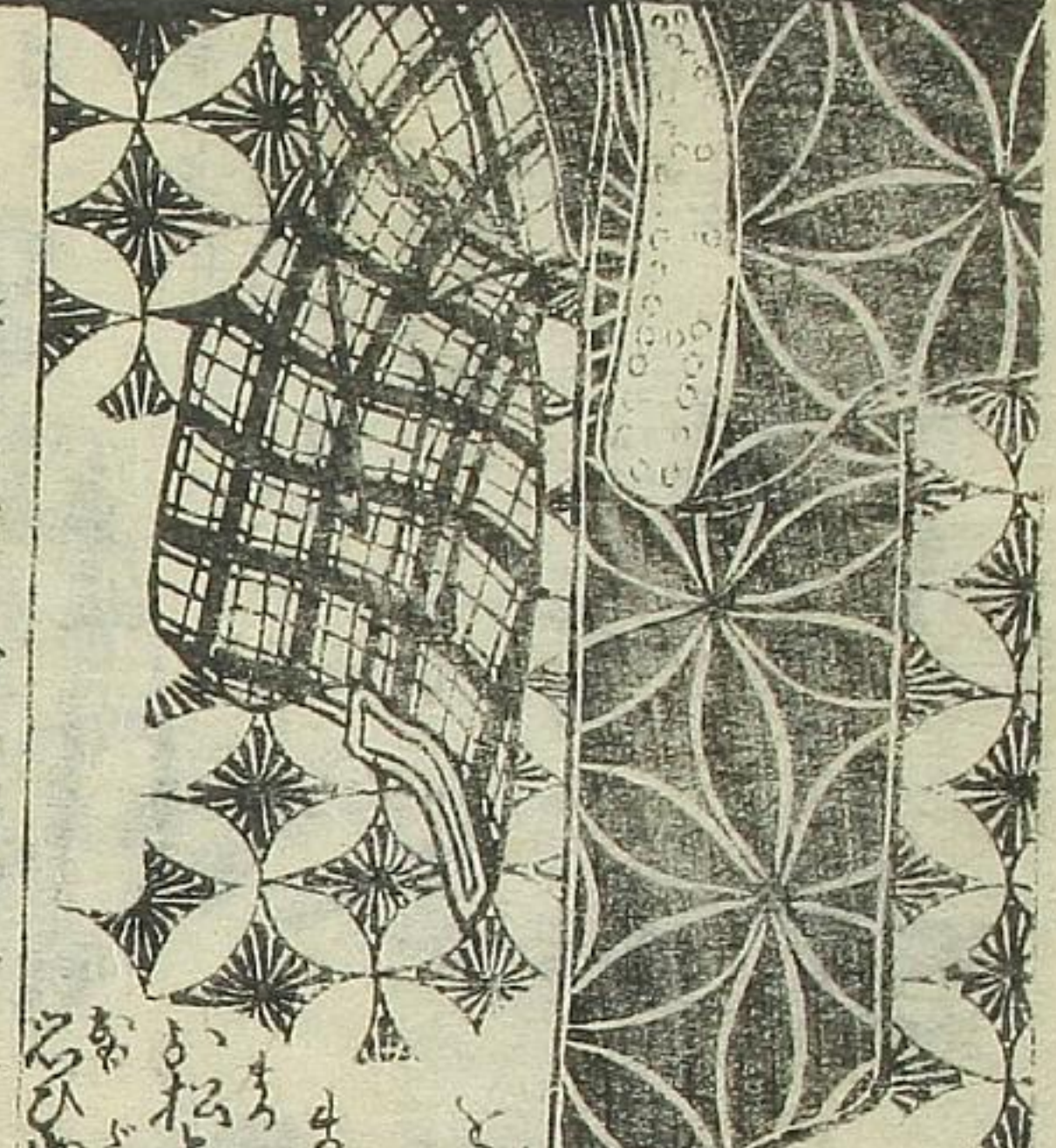


其病者の首を捉へて  
 引ぬ旅の其の上は  
 一に果りて名風邪を基とす



肝腎の路を争ふ  
 何れせしと流石の毒婦  
 病者の首を捉へて  
 引ぬ旅の其の上は  
 一に果りて名風邪を基とす

初めは腹の便りも古  
 十日過ぎれば足らぬ  
 松と透ひ思ふは  
 初めは腹の便りも古  
 十日過ぎれば足らぬ  
 松と透ひ思ふは



初めは腹の便りも古  
 十日過ぎれば足らぬ  
 松と透ひ思ふは

初めは腹の便りも古  
 十日過ぎれば足らぬ  
 松と透ひ思ふは



阿松の港果て夜も  
ろくも眠らぬ

自と其

身不

腹

とんを

外見に着病

みんいとも

芳れ振おも

合宿の旅お松の心

推量する貞女の昔と云

おんれの日々病人の口も



お松の涙

お松の涙  
者おれ主層主  
さかき何

お松の涙  
お松の涙  
お松の涙

お松の涙  
お松の涙  
お松の涙

薬物或は有る人と送りよとせ人由も

心よりの

昔お松の

お松の中の

心のつら

と雲をま

はせあり

三ツの山

宿の旅

りてい

お松の

お松の

お松の



治の隅の

お松の

お松の

お松の

お松の

お松の

お松の

お松の

お松の

お松の

お松の

お松の

お松の涙  
お松の涙  
お松の涙



思下夜の  
いこ更  
ゆき其伝  
枕を巻  
られぬ夜  
明ふ心  
居てね  
前後  
眠り  
啼く雀  
朝飯の膳



朝飯の膳と運ぶ音  
寝てねむけに  
前後も知らず  
眠りが早好  
啼く雀の朝の  
朝飯の膳と運ぶ音  
寝てねむけに  
前後も知らず  
眠りが早好  
啼く雀の朝の  
朝飯の膳と運ぶ音  
寝てねむけに  
前後も知らず  
眠りが早好  
啼く雀の朝の



手  
今  
者  
忠  
已  
傍  
何

財布  
路  
枕  
物  
不  
枕





田舎源氏五十四条	二帖	東より	東の
大日本物産圖會	五帖	大尾後画	手夏
供優三十六花撰	一帖	千代紙	敷
東京開化卅六景	一帖	羊	子
小學入門彩色入	一帖	諸流	藝
尺一寸珍本	一帖	録	手
鹿兒島實記一夕話	三冊	重	札
鳥追技変海上新話前	三冊	百	人
古今名婦傳	一帖	東	京

**分** 和漢書籍  
東錦繪  
問屋

編輯 久保田彦作  
大倉孫兵衛

010190508345



